

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第21回

重信房子



パレスチナでの集団虐殺

パレスチナでの集団虐殺は信じがたい激しさで続いています。スイスにあるEuro-Med Human Rights Monitorは、「せいぜい非難声明に過ぎない米国とヨーロッパと国際社会の保護によってイスラエルの立場は強化されている」と欧米政府を非難し、昨年10月7日から今年5月13日までのジェノサイドの現実を数字で発表しました。「わかっているだけで4万3640人が殺され、そのうち市民が3万9675人。女性が1万382人、

子どもが1万5971人。瓦礫の下にも相当な数の死者が埋もれている」。報告ではガザ地区に対するイスラエル軍のジェノサイド攻撃は、200万人を自宅から追放し、ガザの36のすべての病院を破壊し、祈りの施設モスクは667カ所、教会3カ所を破壊し、教育施設459カ所を破壊。事実を伝えるジャーナリスト141人を殺し、医療従事者の931人を死傷させ、民間人を標的とした攻撃を繰り返し、飢餓を意図的に作り出してい

るという恐ろしいものです。イスラエルの独立報道機関の調査によると、ジェノサイドに使われている「ラベンダー」というAI標的生成システムは、「ハマースとイスラム聖戦の軍事部門に所属」とAIが推認したすべての人間を爆撃目標としたそうです。戦争の最初の数週間、軍はほぼ完全にラベンダーに頼っており、3万7000人ものパレスチナ人がAIで「テロリスト」とされ、その家を空爆対象としたという。また、「パパはどこか(Where's Daddy?)」と呼ばれるAI自動化システムが使用されたことも、今回の調査報道で初めて明らかになったことです。イスラエル軍は標的となった人物が夜、家族全員と一緒にいる時に攻撃するのが通例だったという。「軍事拠点爆撃するよりも家族の家を爆撃する方がはるかに簡単だからだ」という理由で標的の父親を追跡し、家に戻ったところで皆殺しにするAI殺人です。

ガザの住人すべてをAIで監視し、リンク付けし、殺害順位を振り分け、その

結果膨大な「誤差」で無辜の人々の命を奪う「精密」なAI兵器。

西岸地区でも入植者やイスラエル兵によって525人を超えるパレスチナ人が殺され、9155人が逮捕され、そのうちなんの訴状も裁判も無しに「行政拘留」という名目で6627人が拘留されています(6月10日現在)。パレスチナではかつてない苦痛と哀しみの中で「犠牲祭」の祝日を迎えています。

国際司法裁判所の判決をイスラエルに順守させるべき米国などG7の指導者たちは、ジェノサイドを止められず、制裁も求めません。彼らはイスラエルによるジェノサイドの共犯者であり「国際秩序」を自ら破壊しています。5月31日にバイデン米大統領は「イスラエル案」として停戦案を示しましたが、「ユダヤの力」のベンケビル国家安全保障相と「宗教シオニスト党」のスモトリッチ財務相は停戦に応じれば内閣から離脱するとネタニヤフ首相を脅し、ネタニヤフはネタニヤフで、極右を利用して政権にしがみついている状態です。その上ネタニ

ヤフ政権はレバノンのヒズブツラーの司令官を殺して挑発し、戦争拡大を狙ってきました。それも臨界に達しています。

ネタニヤフは6月16日には戦時内閣を解散しましたが、10月7日前の極右内閣に戻っただけでイスラエル国内では総選挙要求を突きつけられ、国際社会からの批判はさらに増えています。

一方米国を中心とした学生のパレスチナ連帯は、世界規模に広がり、5月24日から26日に、デトロイトに全米各地から代表が集まってパレスチナ人民会議が開かれました。会議には3500人が集まり、オンラインで数万人が視聴しました。この会議には反シオニズムのユダヤ人の団体「International Jewish Anti-Zionist Network(IJAN)」も参加しています。会議の中心を担ったのは、4月以来全米の学生のキャンパス・キャンピング運動でイニシアチブを発揮した在米パレスチナ人たちの「パレスチナ青年運動」です。「組織、集団、運動指導者、地域住民、学生、知識人、芸術家、文化活動家として、私たち自身と自由なパレスチナのだ

めの闘いについて考え、意見を交換し、強化するための3日間の集会」という位置づけで開催されました。

安保理で米国が「パレスチナ国家承認」に拒否権を発動して以降、法的拘束力はないとしても国連総会決議でそれを覆し、いくつもの国がパレスチナを国家として承認する動きが活発です。国連加盟の193カ国のうち、既に140カ国以上がパレスチナを国家として認めており、スペイン、ノルウェーなどのEU加盟国もパレスチナを国家として認めると宣言し、動き始めています。日本は国連総会でパレスチナを国家承認に賛成票を投じており、即パレスチナを国家承認を宣言することによってその意志を国際社会に示す必要があります。米国に追随する外交は日本を衰退させるばかりです。

リッダ闘争52周年の集い

6月1日は、リッダ闘争52周年記念集会がありました。1972年5月30日に敢行されたPFLP(パレスチナ解放人民戦線)のリッダ空港制圧作戦と、作戦

ただいまハピリ中



リッダ闘争52周年記念集会以板垣雄三先生(左)、足立正生監督と

に参加した日本人義勇兵を記念して毎年開かれている集会です。「葬式ではなく、祭りを！」と旅立った戦士たちに連帯して記念講演が行われ、みんなで献杯する集会です。

去年は私も獄から出て初めて参加し、リッダ闘争の時代と当時の状況について語りました。今年の講演は日本における中東問題がテーマで、パレスチナ問題の第一人者、93歳になる東大名誉教授の板垣雄三先生が講師です。

講演の後、板垣先生と足立正生さん、私の鼎談が予定されていました。

私はちょっと体調を崩してしまい、前々日にコロナ検査をしたり(陰性でした)、6月1日には、早朝からエコー、CT、胃カメラの検査をしたり、明大土曜会も重なって大忙しでした。でも土曜会で同世代の友人たちや若い人たちが話しているうちに体調もどんどんよくなり、気分も高揚してなんだか病気が治ってしまったようでした。土曜会を中座してリッダ闘争記念集会の会場に向かいました。山梨でパレスチナ連帯運動をやっている

る板垣先生の塾の友人たちも来てくれて、狭い会場は入りきれないほどの人々が集まりました。パレスチナ問題に対する関心が高まり、板垣先生の話を聴こうと、いつもよりたくさんの方が参加していました。

はじめに登壇された板垣先生は、「リッダ闘争に参加した日本人の若者たちがどんな時代の歴史の積み重ねの中で生きてきて、そして義勇兵として戦いを決意していったのかをたどるところから話したい」と、レジユメの戦後年表の説明から話を進めました。

板垣先生の報告は第2次世界大戦後の米ソを軸にした国民国家の再編と植民地・第三世界の解放と独立を求める戦いの国際的な歴史を背景に、日本が積み重ねてきた歴史をたどりました。そして米国の黒人差別反対—公民権運動や、フランス5月革命、ドイツ、イタリア、日本、そしてベトナム、パレスチナの解放闘争のうねりの同時代性の中にリッダ闘争を位置づけて語りました。ドイツのバーダー・マインホフやネグリなどもかかわっ

たイタリア左翼運動、ブラックパンサーなど世界史の流れの中でリッダ闘争をとらえ返そうという試みです。現在のパレスチナ・ガザをめぐる世界の動向というヨコ軸と、1947年のパレスチナ分割とナクバを経たパレスチナと世界の動向、民衆の戦いという歴史をタテ軸に位置づけながらリッダの戦士たちが生きた時代を示しました。

戦後の日本のつくられ方、60年安保、全共闘、新左翼の登場などの歴史がリッダ作戦義勇兵を育てたという話をされました。また、唐十郎の状況劇場が「唐版風の又三郎」のアラビア語劇を引っさげてパレスチナ公演に行った時の話や、リッダ闘争にかかわった学生たちが板垣先生にバイルト行きのお言葉を求めにきたエピソードなどを率直に語りました。70年代のうねりを世界的にとらえ返そうという心意気があふれていました。

第2部は鼎談で、板垣先生がパレスチナ2国家案のまやかしを語り、私がリッダ闘争前後のアラブの実情や熱気、2国家案に繋がるパレスチナ独立宣言を採択

した第19回パレスチナ民族評議会での決議に至る論争などを語りました。鼎談というより足立さんが司会としてリードして私と板垣先生がスピーチする感じになりました。公共施設の閉館時間9時ぎりぎりまで語りました。

同じ時期、バイルトでもPFLLPを中心にリッダ闘争記念日の催しがあり、殉教した奥平さんから戦士たちの墓参会が行われました。PFLLP機関紙アルハダフは、「リッダ空港の英雄的な作戦の52

周年を記念して、在レバノンのパレスチナ解放人民戦線は、2024年5月30日、バイルトのシャティール交差点のパレスチナ革命殉教者の墓地で、日本人殉教者の墓に花輪を捧げることでこの記念日を祝いました。レバノンとバイルトの人民戦線の指導者たち、仲間たち、抵抗運動組織、パレスチナの民衆委員会、レバノンおよびパレスチナの民族・イスラム勢力が出席しました」

「このリッダ空港作戦は、今日ガザと西岸地区で尊厳の戦いを繰り広げているパレスチナの人々にとって、野蛮な占領に対する驚異的な勇氣と抵抗、英雄的な耐久力を示すものとなっています。」

イスラエルの占領は、ラファでの虐殺を引き起こし続けているが、これはイスラエルの軍事的な無力さの結果であり、明確な目的を達成できなかったことを示しています。これらの虐殺は、すべての国際法と国際司法裁判所の決定に対する重大な違反です。また占領者イスラエルに爆弾や化学兵器を供給したアメリカ政府を虐殺の主要な共犯者として糾弾し、

戦争犯罪の裁判にかけるべきです。

パレスチナの抵抗運動はこの民族虐殺に対する断固とした決意をもってパレスチナの存在を護るために戦い続けます。そしてこの記念日に、パレスチナ、レバノン、イエメンの抵抗運動に、パレスチナのために命を捧げた殉教者たちに敬意を表します」と記しています。

月光の会の授賞式に参加して

6月15日、短歌結社「月光の会」の黒田和美賞の授賞式が行われました。

コロナ感染の自粛状況の中で、授賞式が2020年の第8回以降できなかったのですが、今回は第9回、第10回、第11回の受賞者の授賞式が行われることになりました。第9回は松野志保さん、第10回は私、第11回は高嶋和恵さんです。

私は2022年に獄から出所した日に月光の会の方々の努力で『歌集 暁の星』を出版させていただきました。その秋に黒田和美賞の受賞を知らされてびっくりし恐縮すると同時に、とても光栄でうれしく思いました。黒田和美さんは、

月光の会を創設した福島泰樹主宰の盟友で、NHKの「ひよつこりひよたん、島」制作に関わったり、今でいうサブカルチャーの分野で活躍してきた方とのことです。『六月挽歌』という歌集を出しており、その優れた歌を知ることができません。「失ひし標的はまだ世の淵に据ゑ置かれたるレンズのまなこ」「八月の雨のひらに受けてゐる誰にも属してをらぬ冷たさ」「六月の挽歌うたはば開かれむ裏切りの季節ひとりの胸に」「はなむけに飲む苦き茶よ其の予後の足立正生と戦争の歌」などがあります。弱者の側に立つ視線とともに叙情あふれる歌が多く、その感性にハッとさせられます。

当時「受賞の言葉」の最後で私は「この賞を受けるニュースを聞いてから、どうしても『うまく詠もう』と、意識してしまうことです。自己流で良い、虚心に湧き上がる思いを紡ぎ続けよ、と自分に言い聞かせているところですよ」と述べています。当時の月光誌第77号の第10回受賞特集号を読み返してから私は会場の吉祥寺・曼茶羅に向かいました。

部隆志共立女子短大名譽教授が黒田和美賞の選考委員として私への祝辞を述べられました。彼は、私と同時代にブントで活動し三里塚闘争で逮捕されたりと、近い場で縁のあった経験をまず語りました。そして私の歌の原点は「マルクスやレーニンを読み吉本読み私は私の実存で行く」という歌に示される「実存」であると語りました。党派活動というのは実存を失っていくところだと語り、彼女の自分を失わずに生きてきた実存と抒情性の数々の歌が『暁の星』の評価に繋がったなどと語ってくださいました。彼はこれまで『暁の星』ばかりか『はたちの時代』を解題した書評も書いてくださり、初めてお会いしたのですが、ありがたい祝辞をいただきました。

それから乾杯をして、来賓挨拶が続きました。他の歌誌の方々の挨拶では、「現代短歌7月号」がガザを特集し私の66首やエッセイのことを紹介してくださいました。加藤英彦、足立正生、高山文彦、及川隆彦、鈴木英子さんらも挨拶をしてくださいました。皆飲みながら語り合ひ、

3時からの授賞式を前に、受賞者の3人は12時半からリハーサルがありました。というのは、受賞者は授賞式の後に、自作の歌を朗唱したり、エッセイを朗読したり、内容は自由ですが義務があります。

私はパンタさんが曲をつけてくださった私の詩「ライラのバラード」を朗唱しようかと考えていました。でも生演奏のバックミュージックが入るので、オリジナルの新しい詩を作って朗誦することにしました。ちょうどガザのジェノサイドが続いています。かつて友人が1948年のナクバの時、6歳でシオニストの襲撃に遭い、死にゆく母親のスカートの中に隠れて生き延びた話をしてくれたことがあります。その話を基本にしながらい、今回のガザのナクバと合わせて1つのストーリーを作り、それを朗読しながら、最後に自作の歌を朗誦することになりました。

3時前に続々と招待客や歌人仲間が集まり、授賞式が時間通り始まりました。最初に主宰の福島さんが黒田和美さんの来歴、黒田和美賞の由来を絶叫コンサ

ートの姿そのまま示してくださいました。その後私たち3人が壇上に上がり表彰式です。

各自の表彰状の文面が違うのですが、私の表彰状には以下のように記されています。「想像を絶する長期監禁拘留の日々を、定型詩短歌を以て記憶と再生の器として世界と対峙同志哀哭のはたパレスチナ解放と世界の平和を熱禱してやまない歌集『暁の星』に本会は第十回黒田和美賞を贈りその労苦を讃へこれを表彰します」とあります。そして大きな花束と「第十回黒田和美賞 重信房子」と印字されたアウロラ製のボールペンをいただきました。

私は、72年のリツダ作戦の報復で作戦と関係のないガッサン・カナファニーがイスラエル・モサドに暗殺されて以降、PFLPの助言により非公然の生活が続き、その後22年間も獄中に居たりで、こんな晴れがましい機会は予想もしていなかったので眩しく嬉しい思いでいっぱいでした。

その後3人それぞれに祝辞があり、岡

その後最後に私たち受賞者の朗読が始まりました。やはりプロの歌人の方々の朗読は素晴らしい。イマジネーションから歌に詠み落とされる軌跡を感じることが出来るものです。私も熱く朗読しました。タイトルは「ナクバを超えて」です。

「ガザ！／瓦礫が私の体を砕いた。／この瓦礫を退けて！ 起き上がれない。／私の足はどこにあるの？ 私の抱いている孫はどこにいるの？ ここは地の底なの？ 暑い！ 痛い。私の足はどこに行つたの？／私は起き上がれない。／ここはガザ。どうしてこんな目に合うの？／私が何をしたというの？ 私達パレスチナ人が何をしたというの？／何が始まったの？ またナクバが始まったのね。／あのナクバの時わたしは6歳だった。1948年のこと。／ヤーフアアの我が家。たわなに実る果樹園のオレンジ、そしてオリーブの林。

豊かで平安に満ちた日々を覚えている。／シオニストが襲ってくる！ シオニストが皆殺しに来る！」人々の声が響くと、持てるだけの荷物を抱えて家に鍵を

かけ皆逃げる準備を始めた。／……」と続け、最後に「殺すな！ 殺すな！ 殺すな！」と絶叫しました。こんな大声を出すのは若い時のデモ以来初めてかもしれません。最後は「三本締め」でお開きとなり心地よい疲労を感じつつ帰路につきました。

自著「パレスチナ解放闘争史」は3刷になりました。読者カードには「テロリストだと思っていたが見直しました」などの評もあつたようです。パレスチナを理解していただく一助になっていることを本當にうれしく思います。

6月には、「10・8山崎博昭プロジェクト」の関西運営委員会の招請で22日大阪でパレスチナ問題の講演を予定しています。また京都での23日の板垣雄三先生の講演に私も話をする機会があります。とてもうれしいことですが、残念なのは24日に計画されている明大立看同好会の学生たちに連帯して明治大学先輩たちが立看を許さない大学当局への抗議の横断幕スタンディングに参加できないことです。

6月18日

ただいま

SHIGENOBU FUSAKO'S

第22回

重信房子



パレスチナに平和を！

猛暑の日本。梅雨という季節の呼称がもう合わないような酷暑と大雨の日本列島です。でもメイが出張しているカタールは45度とのことです。そうです、暑いあの地域を思い出しています。45〜46度のイラクの夏は乾燥しているので体感温度はもっと高く肌が痛い。水分が蒸発するので汗をかかず塩を吹きます。パレスチナ、レバノンには温暖で、ベカー高原は涼しく過ごしやすいです。ガザは35〜36度くらいですからジェノサイドの中で水

食料、住処もなく、どんなに大変だろうと思わずにはいられません。

ジェノサイドと人間の尊厳

イスラエルの指導者たちがパレスチナ人を「人間ではない動物だ」と教え、「ガザのパレスチナ人全員の皆殺しを」と訴えるラビのエリヤフ・マリに代表される教育者が生徒を洗脳してきた結果、人間性を奪われているのはイスラエル兵たちです。度を越した暴力と殺戮の仕方

にそれが表れています。ハマース司令部が病院の地下にあるはずだとイスラエルが決めたつけていたアル・シファ病院の院長やスタッフは、拘束され毎日イスラエル兵の殴打と拷問の日々であったと、9カ月ぶりに釈放された後、やせ衰えたまま記者会見で語っています。スイスのEuro-Med Human Rights Monitor はガザ地区のさまざまな場所で集団墓地が発見されたと報告しました。病院の中庭、特にハーン・ユニスのナセル医療施設とガザ市のアル・シファ医療施設で発見された集団墓地では、イスラエル軍が逮捕・拘禁した人々を処刑し、その後埋葬したことを示す縛られた犠牲者や、治療中の患者とみられる遺体が発見され、国際的な捜査が必要だと訴えています。イスラエルは、ブルドーザーによる破壊活動に加えて、7万トン以上の爆発物をガザ地区に投下し、いわゆる「緩衝地帯」を作るためにガザ地区の東と北で最大1kmの距離にあるすべての建物を破壊。イスラエル軍はガザ地区からパレスチナ人のアイデンティティを消し去り、ガザ地

区と人々の歴史的なつながりを断ち切るうとしてきたと報告書は告発しています。

対照的にジェノサイドの最中でも瓦礫をかき分け救出し、助け合い労わりあうガザ住民たちの姿に、崇高な人間の尊厳を感じるのにはばかりではないでしょう。占領軍に対する住民の抵抗の権利を謳った世界人権宣言から国連決議に至るまで、人間の尊厳を闘いつつきた歴史を復権させ、世界の最前線でも、パレスチナの人々が抵抗していることが、私たちを含む人々の足元の変革を支えているのだと思わずにはいられません。

います。

ロンドンの医学雑誌「ランセット」に発表された研究によると、イスラエルのガザ攻撃による死者は18万6000人を超える可能性があるとし、この数字はガザの戦前の人口230万人のほぼ8%に相当するとのこと。ガザ保健省によると身元が判明した死者は4万人未満ですが、医療施設や食糧配給網、重要なインフラが広範囲にわたって破壊されているため、本当の死者数はもっと多い可能性があると言っています。研究は警告して

また、イスラエル特殊部隊は、6月8日の4人の「人質救出作戦」時、274人ものガザ住民を殺害しました。特殊部隊は米国が海上に作った棧橋から運ばれる援助トラックを偽装して避難民を装い突入襲撃し、人質救出後は棧橋周辺からヘリコプターでイスラエルに移送しています。米国は最初からイスラエル援助でデルタフォースも11月には参戦したと報じられており、陸路の物資搬入を拒むイスラエルを許して海上に作ったこの棧橋は、軍事目的にもなっている可能性があったかもしれませんが、壊れてばかりいて役立たずのようです。7月5日現在、すでに158人のジャーナリストが殺され、ジャーナリスト保護委員会（CPIJ）によると10月7日以来ガザ、ヨルダン川西岸地区、東エルサレムで、48人のジャーナリストがイスラエルに、3人のジャーナリストがパレスチナ当局に拘束されたそうです。「10月7日以来、イスラエルは記録的な数のパレスチナ人ジャーナリストを逮捕し、行政拘禁によって

訴訟もなく彼らを牢獄に閉じ込めている。そのため必要な情報だけでなく、紛争に関するパレスチナ人の声も奪われている」と、ニューヨークのCPIJプログラムのディレクターが語っています。「ハマース壊滅」を主張するネタニヤフに対し、6月16日イスラエル軍のハガリ報道官は「ハマース根絶は不可能であり、それを唱えることは国民の目を欺くものだ」と批判し、「ハマースは、ガザ住民の思想であり、根絶することはできない」と異議を呈しました。イスラエル軍の死者や負傷者も増えていきます。これはパレスチナの人々の占領に対する様々な抵抗の闘いの結果ですが、イスラエルの「ハンニバル指令」のせいとも考えられるでしょう。「ハンニバル指令」とは「パレスチナ・クロニクル」によると、「たとえ味方を攻撃し、味方に損害を与えるという代償を払ってでも、あらゆる手を使って捕虜となることを阻止しなければならぬ」という規定だそうです。10月7日、パレスチナ勢力の作戦に直面した際に、実はイスラエル兵の無差別攻撃

パレスチナに平和を！

10・8山崎博昭プロジェクト関西集会
2024年6月22日



重信房子

大阪講演で使ったパワーポイントの初めのページの西瓜

二度目の
パワーポ
イントに
チャレン
ジし、前
日まで推
敲して会
場に向か
いました。
関西西
務局の新
田さん、
川西さん

撃でユダヤ人が殺されているのですが、これにはハンニバル指令が影響したと考えられています。ガザ地区とイスラエルを隔てるフェンス近くにあるキブツ・ベエリの生存者ヤスミンさんはイスラエルラジオのインタビュアーで、10月7日のハマースの作戦後、イスラエル兵が間違はなく多数のイスラエル民間人を殺害したと述べました。「イスラエル兵は、人質を含む全員を殺した、非常に激しい十字砲火があり戦車砲撃もあった」と述べました。このような情報がイスラエルの新聞「ハアレツ」などにも掲載されており、今後更に検証されるでしょう。こうした情報暴露もイスラエル国内の政府と軍の矛盾、反ネタニヤフ運動の広がりとながつているのでしょうか。

米政府を中心とする「国際社会」は停戦を口にしつつイスラエルの虐殺を続けさせ武器弾薬支援を続けたままです。イスラエルやその指導者たちは「ハマース壊滅」で一致しつつ「壊滅する」相手と交渉して停戦をするという、矛盾をくりかえしています。「ガザの再建プラン」

もありません。ネタニヤフ政権は再占領・軍政以外の展望を示していません。ネタニヤフは狙撃によって負傷したトランプ大統領再選に期待を寄せ、政権にしがみついたままレバノン侵略、イランへの挑発戦争を繰り返しています。トランプ政権時、米大使館のエルサレムへの移転、UNRWAへの支払い中止、占領地の併合や占領地内の人権活動の合法化など、アメリカの歴代の政策を転換しました。トランプは現在のイスラエルのジェノサイドを容認し、イスラエルの望むように最後までやらせると主張してしました。再びトランプ政権になればネタニヤフはフリーハンドを得てさらにジェノサイドと領土併合を進めるでしょう。

5月に、米軍が食料支援物資搬入の口実で棧橋を作った時からハマースを含むパレスチナの諸勢力は、「ガザに入るいかなる国際軍やアラブ軍も拒否する。もし入ってくれば占領軍とみなす」と声明を発しました。ハマースは停戦交渉の中で、パレスチナ超党派による独立政府が戦後のガザとイスラエル占領下の西岸地

区を運営することを提案していると7月12日のアラブニュースは伝えています。「戦後のガザ行政は、外部からの干渉を受けられないパレスチナ内部の問題であり、外部のいかなるものとも話し合うつもりはない」とハマースらは主張しています。ファタハとハマースを含むパレスチナの14の組織は、7月21日から23日、中国の仲介で北京で話し合い、「北京宣言」で新しい統一政府作りを含む反占領の統一行動を取る方向を確認しました。ジェノサイドを終わらせるためには、イスラエルに対する制裁と、北京宣言にあるパレスチナ人自身による決定を国際社会が尊重しない限り、以降のガザの社会形成は困難でしょう。今こそパレスチナ国家承認による国連加盟で対等な関係を作る時です。

関西集会に参加して

6月22日に「10・8山崎博昭プロジェクト」関西集会に招かれて話をしました。山崎博昭さんは、1967年10月8日の佐藤首相のベトナム訪問に抗議した多く

の青年たちの一人でしたが、警察機動隊の激しい弾圧によって殺された同世代の仲間です。山崎さんの死は闘いの時代の象徴でした。同窓生を中心に彼の遺志を継承して反戦の意思を訴えてきたこの団体について獄で資料や本を読み、寄稿もしていたので私も知っていました。スピーチを要請された時には自然と話ができればと嬉しく思いました。

演題は「パレスチナに平和を！」、スピーチは70分、質問が30分の予定です。

に迎えられて会場に着くとたたくさんの方々が既に集まっておられます。若い司会者が開会を告げると代表の山崎建夫さんが挨拶に立ちました。その後事務局の新田さんが報告「重信房子さんとリッダ闘争について」と今回の私を招請する立場から、はたして重信がリッダ闘争に関わりがあったのか否か、リッダ闘争は本当に無差別攻撃だったのか？ 日本人が一方的に乗客を殺したのか？ 交戦下の戦闘行為ではないか？ など様々な資料から検証、解明した点を提起されました。とてもありがたいと心強かったです。これまでイスラエル大使や公安による情報を垂れ流すマスコミ報道の刷り込みが定着してしまい、「リッダ闘争関与、黒幕」といった私へのフレームアップは無視してきたのですが、出所後はあまりひどいので正そうと発言していた点を捉えて新田さんが検証してくださったものです。

常識的に考えても中東に於いて1年目のボランテアで言葉もできない25歳の私が、当時6万人以上のメンバーをもつPFLPの作戦司令部の秘密作戦計画に

関与できると考える方が荒唐無稽で、フレームアップです。もちろん私は、リッダ闘争に参加した戦士たちの闘いを誇りとし、支持・支援し、彼らの意思を継いで戦おうとしてきましたが、それはリッダ闘争の計画参加や共謀とは別のことです。この新田さんの報告の後、私のスピーチが始まりました。

パワーポイントの表紙は西瓜すいかにしました。西瓜はパレスチナのシンボルです。1967年の第三次中東戦争によってヨルダンの併合下にあった西岸地区とエジプトの管理下にあったガザ地区はイスラエルに占領されました。私が中東に居た70年代、西岸地区から追放されてきた友人がいかにも過酷な占領政策だったかと話していました。イスラエル軍政下、パレスチナの歴史を教えることもパレスチナ国旗を掲げることも禁じられ、教科書も禁止されたのです。占領に踏みじられながらパレスチナ人たちは国旗と同じ赤、白、黒色を持つ西瓜をシンボルとして掲げました。西瓜をシンボルとする連帯が、次第に絵を描いたりして密やかに



立て看同好会に連帯の横断幕スタンディング

広がり始め国旗代わりだったとのことで、西瓜をみんなで見よがしに木陰で写生したり、集まって食べたりして抵抗したとのことです。そんな集会さえ蹴散らされたそうです。今、世界のパレスチナ連帯の街頭デモなどで西瓜が描かれることが多いのは軍政と同じ、自治がない現実のジェノサイドへの抗議のシンボルとして掲げているのでしょうか。

そして「パレスチナに平和を！」の講演の目次を開き、「初めに」で「私の国際主義への飛躍は10・8羽田闘争から始まった」と山崎君とゆかりの10・8闘争に参加していた私の経緯を語り、歴史的経緯、パレスチナ分割からパレスチナ解放勢力登場の1967年以降から現在までパワーポイントを繰り返しながら説明しました。みな熱心で質問も多かったです。私がアラブに行った当時のPFLPとイスラームの関係の質問には、

「当時はアラブ民族主義の時代だったことから語り、最終的にユダヤ人とパレスチナ人の共存は可能なのか？」という質問に

「され、そのマネージャーの個人情報流出、嫌がらせ、行政の介入などでホットだった時でした。憎越だと思いつつ、このマネージャーの良心を支持し、連帯を訴えました。」

講演を終え、翌日には板垣夫妻と高山寺見学などの観光も楽しみました。93歳の板垣先生はちょっと険しい道を「これは山登りだな」と言いながら元気です。華厳宗の高山寺にはベルシャ語で書かれた詩の貴重な宝物があると先生の話でしたが見ることは叶いませんでした。大阪、京都での友人たちとの交流を通して、様々な困難の中で、着実に多様に活動しておられる方々を知り、とても良い学び

は、もちろん可能です、不可能にしてきたのは宗教ではなくシオニズムという人種差別イデオロギーとその信奉者であること、それがパレスチナ民族浄化、排除を作り出してきた歴史的経緯の説明など次々と答えました。

私の講演のあとに水戸喜世子さんの報告「福島島の闘いの現状―子ども脱被ばく裁判からみる―」、糟谷孝幸プロジェクトからの報告と提言、「大学に立て看をとりもどす―京都大学の状況から―」と現場の闘いの報告が続きました。その後40人近い人々が参加して交流会があり、初めて言葉を交わす方々含めて旧知のように大学時代の感覚で皆と語り合いました。事務局の方々の配慮が行き届いていてとても有意義な学ぶ場となりました。

翌日は京都でのスピーチでした。ルネサンス研究所と反戦・反貧困・反差別共闘行動の共催の講演会です。こちらのメインスピーカーは板垣雄三先生なので、私は出版した『パレスチナ解放闘争史』についてなど自由に話して欲しいとのこと。板垣先生の講演は「パレスチナ問題

の機会となりました。

明大横断幕スタンディング・アクション

6月下旬、明治大学アカデミーコモン前広場に明大土曜会十数人が集い、横断幕スタンディングを行いました。行動の背景には昨年11月4日、明大祭で「明治大学立て看同好会」の学生5名が「明治大学20年ぶりの立て看おめでとう」と書かれた立て看板を学内に掲示しようとする、学校当局は学生5名を拘束し警察に通報するという、あり得ない行動を起しました。通報された学生5名は大学当局に「セクトの手先」でないことを宣誓させられ、11月10日授業の出席を禁止され、学内の密室で警察による取り調べを受けたということです。学生曰く、当局はいまだにセクトの影に非常に怯えているそうです。貼り紙と立て看板を持ち込んだだけで警察を学内に導入する当局の姿勢は、言論の自由を徹底的に弾圧する行為だと、明大OB・OGを中心とする明大土曜会として、またかつて「立て看」を書いた世代として、「明治大学の

と欧米現代―パレスチナの現状、シオニズムの歴史的・思想的起源―というタイトルです。とても明快に「パレスチナの闘いはテロではなく抵抗権行使である」という点を真正面に据えながら、シオニズムのナチズムとの共同の歴史などを語り、最後にユダヤ系オランダ人の社会学者ベーター・コーヘンが唱える植民国家イスラエルの平和的解体論を紹介し解題しました。専門的でありながら分かりやすく、みな熱心に講義を受けていました。先生の後に演壇に立った私はどのような思いでパレスチナ解放闘争史を書いたか、「ナクバを超えて」という自作の詩と短歌の朗読で参加しました。スピーチの最後にちよと京都のホテルマテリアルで起きた問題に触れました。6月15日、イスラエル軍関係者の男性から宿泊の予約が入り、ホテルのマネージャーが、イスラエルの戦争犯罪共犯の可能性を理由に予約をキャンセルするようお願いした件です。ホテル側と男性側双方が予約キャンセルで合意して終わったことでしたが、その後、やり取りの一部がネットで拡散

『学生の表現の自由封殺』を許さない」抗議行動として横断幕スタンディングが企画されました。

この日はすでに警備員2名、職員2名が警戒する中、横断幕を出した途端に当局は、規制とビデオ撮影を開始。「規則だから止めるように」との警告に、口では負けない元全共闘、「根拠を示せ。警告文の原本を見せる。警備を委託した大学当局の上司と話がしたい」と延々と押し問答。結局横断幕行動に、特に規制・排除をすることなく、遠巻きに撮影し傍観。さすがに、明大OBの年寄りを実力で排除できない様子でした。でもあまりの猛暑に横断幕を持つ3人以外は木陰へ5分毎に交代。学生たちも立ち止まって横断幕を見ていましたが、熱中症が怖いので約1時間で行動終了。「今後も横断幕スタンディングを断続的にやる」と宣言したとのこと。あまりの非常識な当局に変わってもらいたいと願う自由と自治を求める愛校精神の行動でした。

ただいま SHIGENOBU FUSAKO'S リハビリ中

第23回

重信房子



ハマースのハニヤ暗殺と 新しいリーダー

パレスチナ人の世論調査で大統領候補の筆頭だったハマースのイスマイル・ハニヤ政治局長がイラン滞在中の7月31日に暗殺されるという衝撃的な事件が起きました。ネタニヤフ政権は前日の7月30日には、ヒズブッラー(神の党)の軍事部門の司令官フアード・シユクルをミサイル攻撃で暗殺しています。ヒズブッラーはレバノンで閣僚も出している政党です。また翌8月1日にアルジャジラの若いジャーナリストとカメラマンを殺害

しました。イスラエルは以前から有能なパレスチナ人を抹殺する政策をとってきましたが今、ますます凶暴に有能な人材の暗殺を進めています。8月8日には国連機関UNRWAが運営する学校への無差別攻撃で100人以上の殺傷を行っています。ネタニヤフはイスラエル国民の手前、この10カ月、停戦するふりを繰り返してきました。戦争の拡大によって、イランとアメリカを戦争に引きずり込みたいのです。ネタニヤフの狙いは首相の

地位を維持することです。戦争を停止すれば権力の座を奪われ、刑事被告人として裁判が待っています。トランプ政権になれば、ネタニヤフ案を押し通せると戦争を長引かせているように見えます。しかしハニヤ暗殺は停戦へのプレッシャーを強めています。戦争を抑止したいイランも主権を侵され賓客を殺され黙っているわけにはいかない状況が作り出されています。私はイランが戦略的我慢をできることを願います。

ハマースは6日短い声明を発表し、「イスラーム抵抗運動(ハマース)は、殉教した指導者イスマイル・ハニヤ氏の後任としてヤヒヤ・シヌワール司令官を政治局長に選出したことを発表します。神のご慈悲を祈ります」と述べました。ハマースはガザ地区責任者のヤヒヤ・シヌワールをハニヤの後継者に選ぶことで更なる抵抗と解放の道を宣言しました。イスラエルや米国がテロの親玉のように非難し続けていますが、シヌワールが政治局長になったのは順当な選出と言えます

す。カタールでのハニヤの葬儀で棺を一番前で担いでいたのは、ハニヤの前の政治局長ハリド・メシヤールでしたが、メシヤールが政治局長の時代は、ハニヤがガザ地区の責任者でした。メシヤールは卓越した政治リーダーでしたが、2017年にハマースが新綱領を採用した時にハニヤに政治局長が代わりました。その理由は人民の中にいられるリーダーこそ政治局長になるべきだというメシヤール自身の判断があったと言います。

た。一方2人の逮捕を知ったモサドのヤトウム長官はネタニヤフ首相と相談の上、解毒剤を持ってすぐさまアンマンに飛び、フセイン・ヨルダン王の面会を乞い解毒剤と引き換えに部下の2人の工作員の釈放を求めます。ヤトウムは、「もしメシヤールが死に、部下が裁判に掛けられれば難しい問題になると思ったからだ」と後に述べています。死につつあったメシヤールは解毒剤で結局命を取り留めました。

ハマースはイスラームのシユラー制度(アラビア語で話し合いの意味。かつての部族長老会議など)が決定機関でその決定を執行する代表として政治局長がいるので独裁ではありません。政治局長は党代表のような位置にあります。シヌワールの政治局長就任に対してPFLPは「ハニヤの後継者として大きな責任を担うシヌワールの成功を願う」と表明しました。

ファタハ中央委員会書記のジブリル・ラジューブは「シヌワールは現実的な性格で論理的な人物であり、ハマースがシヌワールを選んだ決定は、殉教者イスマイル・ハニヤの暗殺に対する論理的で予期された対応だ」と述べています。既にネタニヤフ政権はシヌワールを殺害すると公言しています。

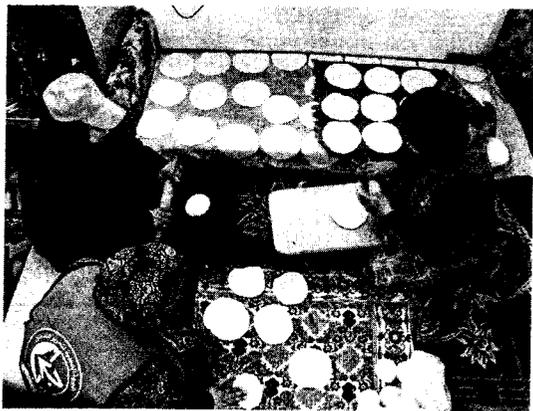
ただいまリハビリ中

このメシヤールは1997年、ヨルダンにいた時に暗殺されかけました。その時の暗殺指令もネタニヤフが初めて首相になった時で、イスラエルの対外特務機関モサドに指示したものです。モサドはヨルダンのアンマンに滞在していたメシヤールの耳に即効性の毒薬をかけることに成功したのですが、実行した2人のモサド工作員がメシヤールの護衛に捕まりヨルダン警察に引き渡され逮捕され、逃げた数人はイスラエル大使館に逃げ込み、大使館はヨルダン警察に包囲されました。メシヤールは毒が回って瀕死の状態でした。

その際ヨルダン王は、代償として終身刑で拘束中のハマース創設者のヤースィーン師を獄から解放することを求めました。そうしなければハマースをはじめとするパレスチナ勢力がモサド釈放を許さなかつたからです。結局2人のモサド工作員の帰国と引き換えにハマースのリーダーのヤースィーン師を釈放し(後にミサイルで暗殺)、メシヤールも回復しました。メシヤールは暗殺を逃れた後ダマスカスを拠点に活動していました。イスラエルは暗殺を国家政策とする国ですが、欧米諸国は黙認しています。

イスラエルによる絶滅・飢餓戦争に対する闘いーパン協同組合

イスラエルのジェノサイド、空爆と人為的な飢餓攻勢の中で、ガザの人々はどのように生き、戦っているか、友人が送ってくれたPFLP機関紙「アルハダ



パン協同組合のパン作りの様子

「フ」を読みながらその暮らしを感じています。友人はガザに30人以上の殉教者や、負傷者を含む親戚がいます。ガザでは悲惨な状況下でも秩序ある暮らしを取り戻そうと人々が闘っています。

パレスチナには昔から各組織の政治的役割に加えて、イスラエル占領下の暮らしの中で仲間と結び合うネットワークがあり、時には論争や意見の相違を生みながらも、パレスチナ同胞として助け合ってきました。ガザ地区では連続したイスラエルの襲撃のために人々は程度の差こそあれ、殺害の標的にされることに慣れてきました。今回「絶滅戦争」（友人はそう呼称）の初めから、占領軍は何千人もの救援活動や社会福祉ネットワークの活動家を故意に殺害しました。「社会福祉活動のネットワーク、機関、団体の組織的な破壊は、施設、病院、団体の本部の破壊に限定されず、主に社会活動の担い手である個人を標的にし、彼らが社会課題に係る集団行動を再編成しようとするあらゆる試みを破壊し、更に厳しい包囲下でガザの人々に大量飢餓を課す戦術を

ためのビニールシートなども提供しています。こちらの活動によって商人は独占的な高値で商品を販売できなくなり、小麦粉1袋も適正価格で販売することを余儀なくされます。それでも、避難民の増加、援助物資や生活必需品をガザ地区に搬入する検問所の閉鎖や現地で働く救援チームが爆撃などの戦闘行為の直接標的にされるなど、多くの課題に直面しながらパン生産を続けています。これは、共

とりました」と述べています。「ガザに届けられる援助物資の数が不足している。イスラエルの検問で、4月でさえ1日平均169台だったトラックが、6月と7月には1日80台以下に半減している」とのことです。

国連の人道問題調整事務所(OCHA)によると、7月に計画されたガザ北部への援助ミッション67のうち、イスラエルが許可したのは24だけだったとのことです。アルハダフは、「イスラエルの展開した絶滅戦争の10カ月間、住民は食卓の主要な材料を奪われ、彼らの飢えを満たす1斤のパンは遠い夢となりました。そこでPFLP緊急委員会は、PFLPのメンバー、幹部、その他のボランティアが、緊急事態に実用的で迅速な解決策としてパン協同組合を作りました」と報告しています。

女性たちは、灼熱しゅくねつの気温の中、粘土窯の熱に耐え、薪を燃やして木の枝を乾燥させ市営のパン協同組合を作りました。最初の段階は身近な家族の範囲で母親や祖母から受け継いだ方法でパンを作り、

に生きる生存の闘いなのです。

ある未亡人は今回のジェノサイドで息子を殺されパンを準備する小麦粉もなくお金もなく健康が悪化しPFLPの緊急委員会に救いを求めました。この女性は今パン協同組合で元気に働いています。

ハーンユニスの東側で避難生活を送っていたザラさん(41歳)も他の家族と同様に小麦粉の不足に苦しんできました。「たとえ小麦粉が入手可能でも、オーブンはなく、木材と燃料が調達できません」。協同組合での仕事を通じて少しでも家族に金銭収入を持ち帰り夫を助け、人々も助けて働き、食べられることに最大の幸福を感じているとのこと。「私は、特に女性がこうした民族的危機の中で役割を果たし、困難な状況で人々を助けるという考えが気に入りました」

金銭的な見返りは要らない、協同組合のボランティアに参加したいという女性たちもたくさんいます。ここでは助け合うことなしに生き延びることはできません。「パン作り」というこの経験は、ジェノサイド戦争のために長い間失っていた

協同組合に育てました。「私たちは、避難民の最も人口密度の高い地域で最初の実験として、ガザ地区南部のハーンユニストラファアの行政区で多くのパン協同組合を立ち上げました」。これらのパン協同組合の経験が功を奏し、日々増加する避難民を助けています。「現在では、ガザ地区の5つの行政区で数十人の女性を雇用し、毎日数千斤のパンを生産する協同組合が数十あります。例えば、ハーンユニス州のパン協同組合は7000斤を生産し、そのすべてが避難民や他の州に無料で配布されています」とPFLPは述べています。「配布対象世帯のリストを作成するボランティアチームが、避難民に毎日温かい食事を配布する炊き出しの活動も始めました。一部の商人の独占と搾取による商品価格の驚異的なつり上げに対抗して、食事を用意し、避難民を支援しています」と。

野菜や果物のバスケット、食料セットなどのさまざまな援助を持続的かつ定期的に提供し、貧しい家族への現金援助に加えて、雨から家具、テントを保護する

意欲を私に与えてくれました。この人道的な役割に参加できることで心が満たされます。私の手で作ったパンを無料で人々に提供できるのがうれしいのです」。イスラエルのジェノサイド、廃墟と化していく空爆下のガザで飢餓と闘っている人々には知恵と暮らしと秩序があります。こんなふうになんが助け合い生活の営みや生きがいを見つけていく人間の姿に、己を振り返り励まされています。

広島「平和の聖地」の変質と長崎市の選択

漫画家中沢啓治さんの『はだしのゲン』のアラビア語版が2020年にエジプトで出版されて、アラブの人々がイスラエルの暴虐と広島ジェノサイドを重ねて語り始めました。ところが2023年に広島市作成の平和教育の副教材から『はだしのゲン』が削除されることを知ってびっくりしました。こんなリアルな当時の現実を伝える素材をどうして削除するのか。

昨年の5月、主要国首脳会議(G7サミット)が広島で開催されましたが、

「核兵器廃絶の聖地、広島」が「核抑止の広島」にすり替えられるのを目の当たりにして憤りを覚えました。ところが広島はもつとひどい状態になっていることを、日本ジャーナリスト会議（JJC）の機関紙やJJC広島支部の方の話で知りました。あのG7サミット以来、広島がおかしくなっていると告発しています。サミット初日の5月19日、核兵器抑止力を肯定する「広島ビジョン」が発表され、以来「平和の聖地」は戦争に向かう流れに利用されてきたようです。『はだしのゲン』だけではなく、米国の核実験で被ばくした「第5福竜丸事件」の記述も削除されたとのこと。

G7サミット後の6月には、松井広島市長が東京の在日アメリカ大使館に向向いて、真珠湾のパールハーバー国立記念公園と広島平和記念公園との姉妹公園協定を結んだとのこと。議会に諮ることも市民に説明することもなく、突然の「協定」が締結されたのです。市民による情報公開請求によって分かった情報によると、この協定締結は、サミット直前

に米国側から持ち込まれ、当初は、「サミット期間中に平和記念資料館（原爆資料館）で日米双方のトップクラスによって調印しよう」と要請されたものでした。広島市民にとっては、寝耳に水。市民団体はさっそく真珠湾に調査団を送り、実態を調べましたが「軍基地の中にある、まさに軍事施設。核兵器廃絶と世界平和の実現を願う広島平和記念公園との友好協定締結などありえない話だ」というのが、その結論でした。

そして今年の8月6日の平和祈念式典です。広島市はロシアとベラルーシを招いていない（2022年から）うえにパレスチナを招待せず、一方でジェノサイド攻撃を繰り返しているイスラエルには招待状を送りました。イスラエルの代表が参加するので、その式典が開催される時間帯午前5時から9時までの4時間は公園内に立ち入った人たちに退去を求め、プラカード、ビラ、横断幕の持ち込みを禁止、ゼッケン、はちまきなどの着用禁止を含む規制、手荷物検査実施も決定。この措置は8月6日8時15分に被爆のシ

ンボル、原爆ドームを含む平和記念公園から、市民たちによる「No War」「No Nukes」の叫びを排除しようとするものです、と広島JJCは訴えています。そして8月6日、多くの人が広島市の措置に抗議しつつ核廃絶を繰り返して訴えたそうです。

長崎市は今年の原爆祈念式典に、ロシアやベラルーシに加え、イスラエルを招待しませんでした。ジェノサイドを続けるイスラエルに対する国際司法裁判所の判決や国連総会のジェノサイド非難決議を踏まえたのでしょうか。鈴木市長は「ガザの危機的な人道状況や国際世論に鑑み」、不測のリスクを避けて今年の長崎の8月9日の祈念式典にイスラエルを招待しないと表明しました。長崎市は政治的なものではなく式典を厳粛に行うためと、招待しなかった理由を表明しましたが、そうとしか言えない政治的脅迫を受けていたのを知りました。米国などG6の駐日大使らが、長崎市に対し、イスラエルを招待国から除外したら「我々もハイレベル（高官）の参加が難しくなる」と

の書簡を7月中旬に送っていたことが8月7日、明らかになったと朝日新聞は伝えました。長崎市からイスラエルへの招待がなかったことから、エマニュエル駐日米大使は広島市の式典には出席したが長崎の式典への出席を見合わせ、英国の駐日大使も侵略国ロシアやベラルーシとイスラエルの自衛権行使を同様に扱うことを批判し、欠席を決めたとのこと。歴史上最初の原爆投下の犯罪を犯した米国政府は謝罪することなく式典に招待されるという長崎市や広島市の寛容さに感謝すべきであって、犯罪国家イスラエルを参加させると恫喝する立場にありません。招待の決定権は優れて長崎市民にあります。

長崎市批判の中心は米国大使のラーム・エマニュエルでしょう。彼はイスラエルロビーとして有名なシオニストです。昔は父親のベンジャミンの方がよく知られていました。イスラエル建国前のパレスチナの民族浄化で活躍したテロ組織「イルゲン」のメンバーでした。オバマが大統領に当選し、ラーム・エマニュエ

ルを首席補佐官に任命した時、父親は「これで息子はイスラエルのために働くことができる」と発言し、当時物議をかもしました。今ではその発言はなかったことにされていますが。広島市と長崎市の今年の原爆祈念式典の対応の違いを直視しながら、日本が主体的に主権を守らないと、とんでもない時代の先兵になりかねないと、しみじみ思うこの頃です。

北京宣言とこれから

2024年7月19日、国際司法裁判所（ICJ）は、イスラエル市民団体が告訴したイスラエルのパレスチナ領土占領に関して「占領されたパレスチナ領土におけるイスラエルの存在は違法である」と判決し、入植地建設を直ちに停止するよう求めました。パレスチナの正義と人権を認めたICJの決定はパレスチナ勢力に力を与えています。

7月22日には中国政府の仲介でファタハ、ハマース、PFLPを含む14のパレスチナ解放組織が北京に集まり、「北京

宣言」に合意し、署名しました。全勢力がパレスチナ解放機構（PLO）の枠内で、包括的なパレスチナ民族の統一を達成し、暫定国民統一政府を形成することで合意しました。14のパレスチナ解放組織は総選挙の実施、統一したガザ再建を目指すことを確認しています。実際これからのように、どこまで統一を作り出せるかにかかっています。2月にはモスクワでも同様の合意を作りながら、3月15日のアッバース大統領派によるハマース非難声明「ガザ地区へのイスラエルの再占領に責任を負い、パレスチナ人の暮らしにナクバを引き起こした者たちには民族の優先事項を指示する権利はない」は分裂を助長していました。そうした本音を持つアッバース派は北京宣言から真摯に統一のために働くか疑問です。アッバース大統領はハニヤの葬儀には参加しませんでした。これはアラブの習慣から大きな意味を持ちます。残念ながら米欧やアラブ諸国政府の動向を見ながら「ハマース排除」に乗り移る危険

は否めません。 8月20日



ガザで進められている子どもたちへのポリオワクチン接種

ました。9月2日のイスラエルのイエデオト・アハロノス紙によると、イスラエル全土の抗議行動に、テルアビブの55万人を含む77万人が参加したとのこと。マリーブ紙では、ヒスタドルト（イスラエルの全労働組合連合）がストライキを決定し、テルアビブ、ギバティム、など4つの主要都市の自治体も、9月2日のストライキと抗議行動に参加したと報じたとのこと。

アルジャジーラによると、イスラエル

の総合コミュニケーションのウェブサイトに「ワラ(walla)」は、「ネタニヤフは、拉致された人々ではなく、自身の連立政権を救うことに決めた。ネタニヤフは、全員が死ぬまで取引を遅らせるために、どんな口実でもでっち上げるだろう。政治・安全保障内閣は、フィラデルフイ回廊に留まるという決定を直ちに覆すべきだ。殺された拉致被害者にとつては遅すぎるが、捕われたまま生きている人々の釈放を求める」と訴えました。多くのイスラエル市民は人質の釈放の為に停戦を求めています。少数ですがパレスチナ人のガザの惨状に心を痛める人もいます。大デモに直面しつつネタニヤフは対抗して記者会見を開き、フィラデルフイ回廊からの撤退がハマースを助けることになることと地図を示して力説しました。ネタニヤフは米大統領選どちらが勝ってもイスラエルを止めることができないと強気です。

ハマースの交渉責任者は、「イスラエルがフィラデルフイとネツアリム回廊（イスラエル軍が南北を分断する目的で造ったガザ中部の帯状地帯）、ラファ検

問所からの撤退なしに停戦合意は成立しない」と言明しました。交渉責任者は、「イスラエルは西岸地区でもガザ同様の空爆ジェノサイドを開始した。パレスチナ人が絶望して服従するのを待っているが、占領と殺戮に直面しているパレスチナ人は、抵抗以外に希望を見いだせず、降伏しないだろう」と述べています（9月2日アルジャジーラ）。

9月12日には北京宣言を発したハマースを含む14のパレスチナ解放勢力が合合し、パレスチナ解放機構(PLO)の枠組み内であらゆる勢力を含む包括的な国家統一を達成し、暫定的な国民合意政府を樹立する必要性を強調し、「政府樹立が不可能な場合には、国民的合意の枠組みの中でガザ地区を管理するための特別委員会を設立する」と述べています。そして、ガザ地区の管理はパレスチナ国内の問題であり、そのパレスチナ人自身による特別委員会のビジョンに従って合意されることを確認しています（在レバノンの衛星放送アルマヤデーインの9月12日報道）。イスラエルや米国の思惑に沿っ

接種が行われる地域の9時から14時の時間以外、外の地域で休戦しているわけばかりかヨルダン川西岸自治区にある北部の難民キャンプ、ジェニーンに対して未曾有の空爆と地上攻撃を行っています。パレスチナ保健省は9月11日、ガザ地区の対象となった生後1日から10歳までの子どもの82・5%（52万7776人）がポリオワクチンの初回接種を受けたと発表しました。継続的な空爆にも関わらず、ガザ地区と北部地区の間を移動する医療チームが大きな危険の中、パレスチナ保健省、UNRWA、世界保健機関、ユニセフの協力により成功させたのです。でもガザ地区でも西岸地区でもイスラエルの殺戮は続いています。ガザの空爆下の生活をネット上で世界に送り続けて20万人のフォロアーを持つ19歳のインフルエンサーのガザの少年も空爆で殺されました。料理や日常のガザの人々の暮らしを伝える人気者でした。「どうしてこんなガザで耐えられるのか？」という質問に、「一杯のお茶とこの素晴らしいガザの景

色があれば耐えられるんだ」と答えたそうです。

夏のガザの温度は34〜35℃。時には40℃に達する灼熱下での空爆と飢餓が続いています。入浴、シャワーを浴びるのは遠い夢。水不足で1人が使えるのは、一日当たり1・5〜2リットルですが、安全な水が不足し、特に子どもの栄養不良、下痢、コレラ、ポリオのリスクは高まりました。トイレは平均700人に一つしかないという状態です。

9月9日からの新学期は学校や教室が破壊され、使える学校は避難所となつているために学ぶ場がありません。パレスチナ教育相は教育レベルを維持すべくウェブサイトを立ち上げ、バーチャルスクールを計画していますが、携帯やコンピューターも電気も不足している中、不満が出ています。低学年はとりえずテントでの授業が始まりました。言うまでもなく教師たちも被災し最悪の環境です。

パレスチナ人はとても教育熱心です。私の友人たちもそうでしたが、パレスチナ人はナクバで何もかも奪われたために、

財産として残るのは教育だと考えるようになったのです。「教育は奪われない財産だから」と、何度難民キャンプの友人たちから聞いたことでしょうか。だいたい長男が犠牲的に働き、弟妹を大学に行かせ、教育を受けた兄弟たちが湾岸諸国で働き、仕送りをして家族を支えます。家族同胞、仲がよいのです。

イスラエルは相変わらず様々な理由を付けて停戦を拒み、ガザからの軍の撤退、特にイスラエルが通称「フィラデルフイ回廊」（アラブでは「サラファデーイン回廊」と呼んでいるエジプトと接するガザ地区の長さ約14km、幅100mの国境に沿った帯状の地域）からの撤退を拒否しています。

8月31日、無差別攻撃が続く最中、イスラエル軍の接近にパレスチナ側はイスラエル人捕虜6人を射殺しました。この事実が公になると、イスラエル国内に大きな衝撃が広がりました。停戦を拒否しているネタニヤフ政権のために殺されたこと、人質釈放・停戦を求め集会、デモ、ストライキが9月1日以降大々的に続き

ネタニヤフ政権の新戦略構想

戦後処理を警戒するからです。

去年10月にジェノサイド開始後に暴露され、「コンセプト・ペーパーだ」とネタニヤフが言い訳した文書には、北から南へとガザ住民を一掃し、エジプト領シナイ半島の一部にテント都市を作って住まわせ、そこにパレスチナ永久都市を造り、ガザには帰還させない、と書かれていたようですが、それは失敗しました。

政権内外からの停戦圧力と退陣、総選挙を求められながらネタニヤフは首相の座にしがみつき、汚職による4件の刑事被告人として裁かれることを回避する考えです。更に極右勢力を利用し、彼自身のイデオロギーを前面化させ、ガザばかりか西岸地区からもパレスチナ人を追放しようと戦略を練り直しました。

80年代にアラファートの顧問の一人だった友人が、8月半ばにメールで次のようなことを知らせてくれました。

「ある入植者がネタニヤフ事務所からの重大なリークを自身のウェブサイトで公

開しました。その後、このリーク内容は削除されました。そのタイトルは「戦争終結とラマツラーの権力をガザへ移す計画の概要とヨルダン川西岸の空洞化」です」とありました。これはネタニヤフの新たな戦略構想です。巧妙ですがパレスチナ側の共同なしには成り立ちません。友人から伝えられたリークの要旨は以下の内容です。

第一に、ガザでは、ハマースとその同盟者の力と構造を最大限破壊し、備蓄を消耗させ、できる限り多くのパレスチナ人を殺害することで、内外の世論をハマース糾弾に向かわせる。特に、ハマースとイスラム聖戦を支持する民衆を狙い、支持者やその家族を殺害・無力化することで、戦後のガザ管理を容易にする。

第二に、この攻撃の進行中、圧倒的な軍事圧力と並行して交渉を続け、国際世論の怒りを吸収し、計画通りに進めること。交渉では、アメリカの協力と圧力を借りて、ガザから人質を取り戻すために限定的な停戦を行う。この期間中に、アッパース大統領と彼の自治政府、軍が国

際的な仲介者を通じてガザに入ることで、ガザでの自治政府の権力復興を正当化させ戦争が事実上終了する。この結果、ハマースとの合意は不要となる。

第三に、新たな現実のもとでガザの限られた領域にイスラエル軍は留まり、必要に応じて深部に侵入できるようにする。その後、西岸地区ラマツラーのアッパースらの自治政府を終わらせ、西岸のパレスチナ人を減少させる。そのために、集団的な罰則を段階的に導入し、住民が自発的に西岸から移住することを促す。これは訓練された入植者の助けを借りて行う。

第四に、アッパース大統領は、「ガザを自治政府が統治する計画」の実施にただちに取り組み用意があり、これによりエジプトとの国境管理の問題を解決させる。ハマースの統治が弱体化し、UNRW Aに代わるイスラエルにとって信頼できる機関によって、援助がガザに届くことが保証される。その結果、ハマースや望ましくない団体への資金や援助が届かなくなる。

また、アッパースの部隊がガザに移行

することで手薄になる西岸で、新たな攻撃的な行動が行われないよう武装解除を進め、新しいガザ政府を守る役割を果たす。

第五に、ガザへのビジネスパートナーや労働者、その家族の移住を促進し、再建プロジェクトや新しい雇用機会を活用させる。これは、西岸での懲罰的措置と相まって、人口移動を促進し、一度ガザに移った者の西岸への帰還をほぼ不可能にする。さらに、アメリカやパートナーに、リベラルな団体や機関のプロジェクトに焦点を当てるよう促し、これにより、現在のガザの過激な基盤に変化をもたらし、開放的で自由な環境を醸成する。

この計画を成功させるためには、法改正や教育カリキュラムの変更、モスクでの説教やメディアの監視が必要。すでに多くの宗教指導者や思想家、教育者が排除され、新たに任命される者はハマースの思想と無関係で中立的であることが求められる。

この計画は、アメリカとヨーロッパの同意を得ており、地域のアラブ諸国からの承認と賛同を得た複雑な段階的プロセ

スに基づいて実行される、とのこと。

既にネタニヤフは、財務相兼国防省付大臣であるスモトリッチに西岸地区の入植地やパレスチナ人に対する管理支配の権限を与え、占領地の軍政を民政に変えつつあります。入植地や西岸地区の建設計画最高委員会と治安管理官責任者にスモトリッチの仲間の「宗教シオニスト党」に所属する文官が就いています。彼らが家屋の取り壊し命令や建築許可を発行したり、違法な入植を合法化したりするのは、「発表のない段階的な併合」とパレスチナ人は見なしています。最も危険なことは、スモトリッチが本来長官を務める国防省の「民政局」(パレスチナ問題の管理責任)の役割を廃止し、ヨルダン川西岸の入植地に対する軍事支配を終わらせ、その役割をイスラエル住宅省に譲渡し、あたかもイスラエルの土地であるかのように振る舞うことだとパレスチナ人は警戒しています。

この情報を得て腑に落ちたのですが、「ある米政府高官が、ガザとエジプトの国境を確保するための最も可能性の高い

選択肢は、米国が訓練したパレスチナ軍を創設することだと示唆した」とワシントン・ポスト紙が報じていたと、9月4日のPFLPアルハダフが指摘していたことです。同じ文脈で、EUは、パレスチナ自治政府と協力してラファ国境検問所の監視に戻る用意があると表明し、エジプトは賛成しています。オスロ合意によってイスラエルに代わって自治政府を監視してEUが国境管理監視をしていましたが、ハマースがガザを制圧した後、その役割が終了しました。こうした記事の背後には、自治政府をガザ統治と呼び寄せて西岸地区を手薄にさせ、西岸地区パレスチナ住民をあれこれの理由で減らして入植地を拡大しユダヤ人口増加を目指す上記ネタニヤフ構想と響き合うものがあります。

ネタニヤフの思惑が成功する前に、本人の失脚もあり得ます。しかしこの極右の戦略構想はかつてと同じように今後も繰り返し登場するでしょう。更に今、レバノンに対するイスラエルの無差別攻撃が激化し戦争が拡大中です。(9月16日)